

「揚羽蝶が砕けた夜 紹介文」

岡和田晃

第2期『エクリプス・フェイズ』シェアードワールド小説企画の第3弾は、渡邊利道の小説「揚羽蝶が砕けた夜」である。

『エクリプス・フェイズ』には「月のエゴ・ハンター」という人気キャラクターがいる（『Role&Roll』誌Vol.92に訳載）。「ロスト」と呼ばれる世代に属する彼らは、超技術をもって人為的な促成を強いられた子どもたちのことで、その多くは発狂するか、あるいは自死を余儀なくされた。しかし、生き残った少数の者のうち、自分はいったい何者であるのかを探り、ひいては世界の神秘を解き明かすため、あてのない旅路に出るといふ選択をした者もまた存在したのである。

自らが狂気の縁をさまよっていることを自覚しながら、フェューチュラという特殊な義体を身にまとい、超能力を駆使して未来を拓く彼らの姿は——クリストファー・ノーランが監督した映画『ダークナイト』に登場する「ポスト9・11」のダークヒーローたちとも共振を見せ——『エクリプス・フェイズ』宇宙にいつそうのアクチュアリティをもたらししている。

今回お披露目する「揚羽蝶が砕けた夜」は、ずばり、この「ロスト」の内面に焦点を当てた作品だ。読み手を心地よく眩惑させる舞台描写はJ・G・バラードの諸作を彷彿させるが、機械化された「内宇宙<sup>イナースペース</sup>」の表現とも言うべき精密な描写の妙、随所に仕掛けられた「現実」と「虚構」および「生」と「死」を対照させるギミックを堪能してほしい。「ロスト」の在り方を想像することは、あなたの『エクリプス・フェイズ』宇宙にいつそうの深みをもたらすことだろう。そして、タイトルにも掲げられた「揚羽蝶」が意味するものは……？　じっくりと再読を重ね、散りばめられた世界の破片を、あなたなりに繋ぎ合わせてみてほしい。ラストの一行は、豹頭の英雄グインの道に続くものか？　それともアナキン・スカイウォーカーが陥った奈落を示しているのか？　なお、舞台となるハビタットの設定等には、作者が独自に想像力を膨らませた部分がある。

渡邊利道は「独身者たちの宴　上田早夕里『華竜の宮』論」で第7回日本SF評論賞優秀賞を受賞、その後、立て続けに「エヌ氏」で第3回創元SF短編賞飛浩隆賞を受賞、評論執筆と小説実作を併行して手がける才人である。とりわけ「エヌ氏」（『原色の想像力3』東京創元社に収録予定）は、「スタニスワフ・レム「エフ氏」をヒントに周到に組み立てられた完成度の高い短編。超越者ふたりのバトルを（まったくそう見えな

い典雅なスタイルで、美しく描く。(大森望)、「レムの作品に想を得たというが、ここまで見事に換骨奪胎されていては文句はない。(日下三蔵)」、「語りのダイナミックレンジを抑え、その幅の中で魅惑的な謎、底の見えない感情の動き、頹廢的なニュアンスなどをニュアンスゆたかに出し入れして読者をつかまえる。全体のちようど折り返しの位置に置かれた一撃、その後の超めくるめく展開さえ抑制のうちに収める腕前は大したものだ。(飛浩隆)」と、選考委員の絶賛を集めた。本作は受賞第一作にあたる。筆者はアマチュア時代から渡邊利道の小説を愛読してきたが、本作は「エヌ氏」の系譜に連なるものながら、ともすれば同作以上に、渡邊利道の“ひと皮剥けた”新境地を示す快作と言ってよいだろう。